

野村啓治准教授追悼号の発刊に寄せて

春の気配がキャンパスに溢れ、新しい学年が始まろうとする本年3月31日、野村啓治先生が不帰の旅に立たれました。

野村先生は1974年に本学経済学部を卒業された後、米国に留学しウィスコンシン大学、同大学院などでスピーチ・コミュニケーション学を修められました。日本に帰られてからは日本コミュニケーション学会に所属され、同学会では「英語スピーチの名手で先駆者の一人」として活躍されたとのことです（大崎正瑠教授による）。学生時代の恩師である徳座晃子先生（現名誉教授）とのご縁により1994年から本学の非常勤講師を勤められ、1997年に専任教員に就任されました。その後は、2006年度から新カリキュラムを導入した際には必修科目に「英語プレゼンテーションⅠ」を設けることを提案されるなど、本学の3学部英語教育を中心的に担って来られました。

「英語スピーチの理論と実践」と題する野村先生のゼミは英語スピーチ・コミュニケーション能力の開発を目指すものでしたが、「ゼミ合宿の卓球大会で先生の腕前に驚いた」とか、「アルコールが入ると海外経験を熱く語ってくれた」といったゼミ生たちが伝えるエピソードからも想像されるように、先生はきびしい指導の反面、心から学生を愛し学生からも親しまれる良き教育者でありました。

私と野村先生とは同じ全学共通教育センターに所属していたものの、学部も専門領域も異なり、親しくご交際をいただく間柄ではありませんでした。ところが私が2年間の国外研究を終えて2008年に帰任すると、思いがけず全学共通教育センター長を拝命し、3学部英語担当教員のリーダー格である野村先生との接点が生まれました。とくに英語担当専任教員を新規採用するための人事委員会の座長をお願いした関係で、折に触れていろいろとご相談する機会が増え、先生の生真面目なお人柄に触れることになりました。

いうまでもなく人事はストレスの強い仕事です。万人を納得させる完璧な人材というのは存在しないでしょう。それでも、膨大な応募者の中から研究業績、教育実績、人柄などを総合的に判断して、最終候補者を絞らなければなりません。先生の真面目すぎる人柄は、あるいはそんな仕事には不向きだったかもしれません。しかし、その重荷は誰かが担わなければならず、野村先生以外に適任者はいませんでした。

人事委員会座長としての責任を先生は几帳面に果たされましたが、昨年夏以降体調を崩され、秋が深まるとともに休講されることも多くなりました。重いご病気でないことを祈るような気持ちでしたが、2009年の新年が明けてから、とうとう先生ご自身から深刻な病名を告げられることになりました。私の事務室で二人きりでお会いしましたが、野村先生は落ち

野村啓治准教授追悼号の発刊に寄せて

着いた態度で病状をみずから説明して下さるとともに、新しい年度にも何とかゼミだけは授業を続けたいという希望を述べられました。その平静な態度と、教育への情熱、学生や同僚への責任感の強さに深い感銘を受けたことを記憶しております。

その時、私としては、しばらくは授業のことは心配なさらず、回復と職場復帰の希望をもって療養に専念して下さいようお願いするしかありませんでしたが、果たしてそれが先生のお気持ちに沿うことであったかどうか、現在にいたるも、よくわかりません。

ご自身がクリスチャンであることを、この時、お伺いしました。のちにお聞きしたところでは、奥様は教会のオルガニストを務めておられたとのことでした。

ご葬儀は本年4月4日、先生の故郷である新潟県の日本キリスト教団新津教会で行われました。私はご葬儀の前日にその教会にお別れに出向きました。東京から3時間かけて到着してみると、駅前の道路沿いにポツリと小さな教会がありました。白い花で覆われた祭壇に棺が安置されておりました。万事が清浄な雰囲気でした。奥様が棺の蓋を開けて下さり、先生と対面することができましたが、そのお顔はきわめて穏やかでした。その時、私の心に浮かんできたのは、「ああ、先生はようやく肩の荷を降ろされたのだ」という思いです。ご遺族には失礼かもしれませんが、野村先生が、与えられた責任を精一杯に果たした上で静かに世を去られたことに深い敬意と、むしろ羨望に似た思いすら抱かされたのです。

野村先生が心を砕かれた人事によって選考され採用された先生方は現在、幸いにして本学英語教育の中核として目覚しい働きをして下さっています。野村先生の遺志が、このように目に見えない形で受け継がれているのではないかと思うほどです。

野村先生、どうかゆっくりとお休みください。

2009年10月25日

全学共通教育センター長 徐 京植